

読解力を向上させるためのプログラム —LTD 話し合い学習法と反転授業の手法を取り入れた試み—

The improvement program of Reading Literacy —The method which LTD and Flipped Classroom—

上村 和美*
Kazumi UEMURA

Abstract

In order to heighten reading literacy, it is required to read a book beforehand. But, if deficient knowledge and the motivation to reading are low, a book cannot be read beforehand. In this research, the technique of LTD and Flipped Classroom. When reading a book beforehand, the method of being effective was found.

キーワード：読解力, LTD, 反転授業

I はじめに

大学教育のユニバーサル化が進行する昨今, 大学生の低学力化が語られるときには, 同時に本を読まない「活字離れ」の問題がとりあげられることも多い。大学の教育現場においても, 指定された共通テキスト(いわゆる教科書)をほとんど読んでいないケースや, 読んでいても内容の理解に至っていないケースに遭遇することがしばしばある。このような学生の多くは, 読書習慣がない上に, 教室外での予習・復習などの学習習慣もない。活字を目にする習慣がないゆえに, わからない単語を調べる, 大切な部分にマーキングする等の「読むための基本的なスキル」を知らないのである。つまり, 「本を読まない」のは「本を読めない」ことと同義なのである。

OECD(経済協力開発機構)が15歳児を対象に実施したPISA(Programme for International Student Assessment)の調査結果がある。レベル1未満からレベル3の範囲ではOECD平均値より低く, レベル4から5の範囲ではOECD平均値よりも高いという結果が出ている。これは読解力の高い生徒がいる一方で, 平均以下の生徒が数多く存在すると言えるだろう。また, PISAが定義する読解力とは, 単なる読解(Reading)ではなく, 読解力(Reading Literacy)である。PISA調査における「読解力」は「自らの目標を達成し, 自らの知識と可能性を発達させ, 効果

* 関西国際大学人間科学部

的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。」と定義されている。また、読む行為のプロセスとしては、①「テキストの中の情報の取り出し」、②書かれた情報から推論して意味を理解する「テキストの解釈」、③書かれた情報を自らの知識や経験に位置付ける「熟考・評価」の3つの観点が設定されている。

本研究においても、この調査中の「読解力」の結果に特に注目したい。本研究における「読解力」とは、単なる読解（Reading Comprehension）ではない。ここではPISAが定義する、「リーディング・リテラシー」（Reading Literacy）を指すのである。

筆者が研究代表者を務める科学研究費補助金による研究チーム^{注1}では、読解力の構成要素について、暫定的にはあるが、以下のように定めた。

表1 読解力の構成要素

言語知識	局所的理解	全体的理解	表現力
漢字の読み・書き取り・語の意味・慣用句・コロケーション・オノマトペ・文法（助詞）	接続詞・指示語・原文復帰・計算式・文章の長さ・適語・（慣用句・オノマトペ）	整序問題・タイトル・主旨・要約・表層構造（○×）・マトリックスにする	説明問題・グラフ or 表の読み取り

これらの構成要素は、研究チームで実施した「読解力診断テスト」を制作する際に、何をもって読解力があるとするのかという点について整理したものであり、現在も検討を続けている。したがって、この分類が完成版ではない。また、「読解力診断テスト」の詳しい内容については、報告書など別の機会に委ねることとする。

研究チームでは読解力を向上させるための手段として、授業にアクティブラーニングの要素を取り入れることを試した。その成果は、関西国際大学の「ウォーミングアップ学習」のプログラム「ゼミナール入門」における教師用の進行表として活用されている。また、課題図書『続ける力』（伊藤真著，幻冬舎文庫，2008）を事前に読んでくる仕掛けとして，“リーディングガイド”という読解の基本を説明したリーフレットと，“Preparation Sheet”という予習シートを作成した。

しかし、実際に「ゼミナール入門」を担当してみると、これらの予習用の教材を準備しても、残念ながら必ずしも文庫本全体を読み終えているわけではないという感覚があった。つまり、予習シートに関連する部分だけを読んできているという感覚である。この部分をいかにして、解決するかが課題となった。

次に、LTD（Learning Through Discussion）という協同学習の手法を取り入れることも検討したが、この手法が「予習」に重きを置くものであるものの、予習ノートを作って読み込んでくる以外の詳しい方法については示されていない。また、知識不足や読書そのものに対してのモチベーションが低い学生の場合、予習を自学で行わせるのには、かなりの困難を伴う。予習ノートを作るだけでは動機付けにはつながらないだろう。

本稿では、読解力向上の重要な要素として「予習」を位置づけ、それを効果的に行うためにLTDと反転授業を活用した予習方法の検討を行う。

II LTD 話し合い学習法とは何か

LTD とは、Learning Through Discussion の頭文字を取った略で、“話し合いによる学習” という意味である。協同学習 (Cooperative learning) の一手法である。安永 (2011)^{註2)}によると、考案者はアメリカの社会心理学者ヒル博士 (W.F.Hill) で、1962年に提案されている。日本では、約10年前から高等教育に取り入れられており、理論的・実践的検討が続けられており、一定の効果があることも証明されている。

LTD は以下のような8つのステップで構成されている。

表2 LTD 話し合い学習法の過程プラン

ステップ		ステップの活動内容	配分時間
St.1	導入：		3分
St.2	語彙の理解：	語彙の定義と説明	3分
St.3	主張の理解：	著者の全体的な主張の討論	6分
St.4	話題の理解：	話題の選定と討論	12分
St.5	知識の統合：	他の知識との関連づけ	15分
St.6	知識の適用：	自己との関連づけ	12分
St.7	教材の評価：	著者の主張の評価	3分
St.8	集団の評価：	ミーティングの評価	6分

< 出典 > 『大学の学び—教育内容と方法』 p.270より

このプランは、ブルームの教育理論から案出されており、我々の思考過程と話し合い過程の理想的な実践モデルになっているものである。受講生は各自で「予習ノート」を作り、St.1からSt.7までを予習で行い、教室でSt.8のミーティングを行うものである。予習がかなり重要であることがわかる。しかし、知識不足の学生や、読書そのものに対してのモチベーションが低い学生が、これらの予習ステップを自分だけで行うのは、かなり難しいことであろう。

III 反転授業とは何か

近年、「反転授業」という用語を耳にすることが多くなってきたが、まず、「反転授業」とはどのようなものかについてまとめておきたい。

反転授業の基本的なコンセプトは、従来は教室で対面形式により行われていた知識伝達をオンラインビデオを用いた自宅での予習とし、教室では予習を前提にした議論やグループワークを行うことである。つまり、従来の「自宅」と「教室」の役割が反転しているのである。英語では、Flipped Classroom と呼ばれ、日本語では「反転授業」という訳語が用いられている。

反転授業の実践に向けたステップは、おおよそ以下ようになる。

- ① Plan (企画)： 授業の構成内容とビデオの収録内容を考える

- ② Record (撮影)： オンラインビデオを収録する
- ③ Publish (出力)： ファイルに出力する
- ④ Deliver (配信)： 配信 →対面式授業

また、反転授業では自宅と教室を反転させてはいるが、オンライン教育を理想とするものではないと考えるべきである。むしろ、スライドやオンラインビデオ等による予習を徹底することで、授業での“より深い学び (Deep Learning)” が実現するのである。つまり、反転授業とは、従来の対面型授業が理想形を実現するためのものなのである。この点においては、オンライン教育の理想を追求しようとする MOOC^{注3} (Massive Open Online Course = ムーク：大規模公開オンライン教育) とは立場が異なると言えるだろう。

さらに、反転授業は授業時間の構成も変化させる。次に示すのは、『反転授業』の中で説明された、授業時間構成の比較である。

表3 従来の授業と反転授業の授業時間構成の比較

従来の授業		反転授業	
活動	時間	活動	時間
ウォームアップ・アクティビティ	5分	ウォームアップ・アクティビティ	5分
前夜に取り組んだ宿題の確認	20分	講義ビデオの内容についての質疑応答	10分
新しい内容の説明	30～45分	個別の実習や実験など	75分
個別の実習や実験など	20～35分		

<出典> 『反転授業』 p.44より

活動の導入部分に変化はないが、反転授業では「個別の実習や実験」という応用的な側面に時間を多く割いており、その時間は従来型の授業の約2倍である。したがって、時間構成を変化させるだけでなく、教員にはアクティブラーニングが実践できる力を要求されるのである。

IV LTD と反転授業のブレンディングに向けて

授業の中で読解力を向上させるプログラムを考えていくとき、問題となるのはテキストを「読む」時間をどこに設けるのかということである。予習に位置づけるのが一般的であるが、読んでこなかった学生が多いからと、授業中に設けては、肝心の授業時間が削られる上、学生は「読んでこなくても、授業中に読む時間を作ってもらえるから大丈夫だ」と考えるようになってしまい、学習意欲は低下し、その結果、授業が深い学びにつながらなくなってしまう。

また、「読む」という行為自体を、実際に行ったかどうかを検証することが困難である。一口に「読む」レベルには違いがあり、表1にあげた構成要素のうちのどの力が不足しているのかを特定する必要がある。

本稿では、入学前教育「ウォーミングアップ学習」で用いている『続ける力』を題材に、予習用のオンラインビデオを試作する。

オンラインビデオを作成するには、有料ツールや無料ツールなど様々なソフトが存在している。本研究では、PowerPoint のアドインである“Office MIX”を使用する。“Office MIX”の特徴は、Windows 版の PowerPoint2013のアドインとして動作することである。したがって、PowerPoint と統合されるため、新たにオンラインビデオソフトの操作を覚えなくてもすむのである。“Office MIX”は、サイトから無料でダウンロードすることができる。

“Office MIX”をインストール後、パソコンを再起動し、PowerPoint2013を起動すると、メニューバーに[MIX]というタブができる。[MIX]タブをクリックすると、図1のようなメニューが表示される。

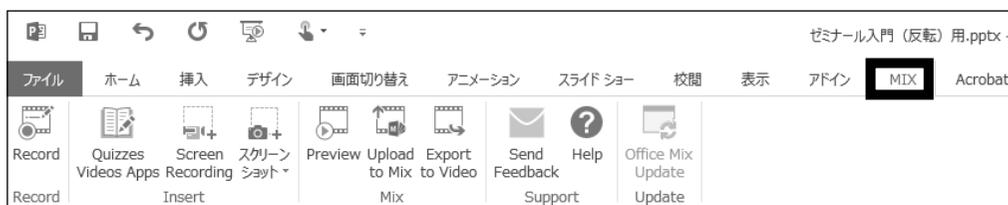


図1 PowerPoint2013にアドインのMIXを組み込んだメニュー表示と画面

作成した PowerPoint のスライドを表示しながら、[Record] ボタンをクリックすると、録画が開始される。録画中は、図2のような状態になる。



図2 録画中の画面

撮影が終われば、[Preview]をクリックする。そうすると、スライドに動画が追加されたオンラインビデオが再生される。

次に、[Export to Video]をクリックすると、MPEG-4形式のファイルとして出力される。これで、オンラインビデオが完成する。

もちろん、作成したオンラインビデオを公開しなければ、反転授業は成立しない。そこで、本研究では本学の e-learning システムである WebClass 上で再生できるようにした。WebClass とは、データパシフィック社が開発した e-learning システムで、本学では教務システム UniversalPassport の履修情報と連携させており、履修登録した科目のクラスが自動的に表示さ

れる仕組みとなっている。

Webclass にログイン後、科目を選択すると、コンテンツ一覧として、[ユニット]、[会議室]、[資料]、[テスト／アンケート] などのメニューが表示される。ここでは、[資料] に完成した MPEG-4 ファイルを [添付資料ファイル] として保存する。そのコースを開くと、図3のような画面になる。



図3 WebClass 上で再生した画面

図3のように、スライドの一部にビデオ画面ができ、スライドの内容とビデオの内容を連動させながら見ることができる。

今回、基本的な動作確認ができたので、この方法で教材作成のコンテンツを増やしていく。ただし、本学では入学前にネットワークを利用するためのIDの発行を行っていないため、実際の入学前教育では実践できないが、『続ける力』は、入学後に「初年次セミナー」や「基礎演習」で使用されている。そこで、今後はそれらの授業で試用できるコンテンツを作成していくことを目的としたい。

V おわりに

前述のように、ICT環境のめざましい発達が反転授業の発展の手助けをしている。たとえば、YouTubeのような動画共有サイト、およびスマートフォンやタブレットの急激な普及によるものである。教員側にはウェブカメラを備えたパソコン、スクリーン録画用のソフトウェア、学生側には動画を閲覧する環境が整えば、専門的な知識がなくても反転授業が実践できるようになっているのである。しかし、そのことは同時に、教員にとっての授業に対する意識改革を求めるものでもある。

謝辞

本稿は平成22～26年度科学研究費補助金基盤研究C（課題番号22530840）「大学初年次でのクリティカル・リーディング力育成カリキュラムと教材開発に関する研究」の助成を受けた研究成果の一部である。

【参考文献】

- 1) 井上弘樹『反転授業実践マニュアル』海文堂出版, 2014
- 2) 上原裕美子訳, 山内祐平, 大浦弘樹監修, ジョナサン・バーグマン, アーロン・サムズ著 『反転授業—基本を宿題で学んでから, 授業で応用力を身につける—』オデッセイコミュニケーションズ, 2014
- 3) 上村和美, 藤木清:「大学入学時における読解力と「日本語運用能力テスト」との関係に関する一考察(2)」『関西国際大学紀要』, 第13号 51-56頁 2012
- 4) 上村和美, 藤木清:「大学入学時における読解力と「日本語運用能力テスト」との関係に関する一考察」『関西国際大学紀要』, 第12号 89-99頁 2011
- 5) 上村和美, 西川真理子, 横川博一, 堀井祐介:「大学初年次における読解力向上のための基礎的研究」『関西国際大学研究紀要』, 第10号 135-147頁
- 6) 上村和美:「本の読み方」『AERA Mook 勉強のやり方がわかる。』, 2004 36-41頁
- 7) 苧阪直行『読み—脳と心の情報処理』朝倉書店 1998
- 8) 苧阪真理子『ワーキングメモリ』新曜社 2002
- 9) 学習技術研究会『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—』くろしお出版 2002(改訂2006, 2011)
- 10) 加藤大「宿題動画の魅力に頼らない反転授業」『e-Learning 教育研究』8, 58-60頁, 2013
- 11) 河合塾編:「深い学び」につながるアクティブラーニング—全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題— 東信堂 2013
- 12) 国際交流基金著:『国際交流基金 日本語教授法シリーズ7 読むことを教える』ひつじ書房 2006.
- 13) 国立教育政策研究所:『生きるための知識と技能2 - OECD 生徒の学習到達度調査(PISA) 2003年調査 国際結果報告書』ぎょうせい 2004
- 14) 中條和光:「4 文章の理解」, 針生悦子編:『言語心理学』朝倉書店 2006 56-76頁
- 15) 古庄高「LTD 話し合い学習法」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』世界思想社, 237-249頁, 2013
- 16) 安永悟「4 LTD 話し合い学習法と不確定指向性」杉谷裕美子編:『リーディングス 日本の高等教育② 大学の学び 教育内容と実践』東信堂 2011 267-290頁
- 17) 安永悟『実践・LTD 話し合い学習法』ナカニシヤ出版, 2006
- 18) 安永悟「対話による学習モデル—LTD 話し合い学習法」杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部, 107-144頁, 2004

【雑誌記事】

渡辺敦司「国内大学にオンライン普及へ:JMOCが発足,『反転学習』も研究」『内外教育』6290号, p.10, 2013.11.12

【インターネット】

PISA の読解力の定義

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/001.htm

【注】

- 注1 平成22～26年度科学研究費補助金基盤研究C（課題番号22530840）「大学初年次でのクリティカル・リーディング力育成カリキュラムと教材開発に関する研究」で、研究メンバーは神戸大学・国際コミュニケーションセンター・横川博一、金沢大学・大学教育開発・支援センター・堀井祐介、國學院大學・人間開発学部・成田信子、甲子園大学・総合教育研究機構・西川真理子、大阪国際大学・国際コミュニケーション学部・米田薫、関西国際大学・人間科学部・藤木清、関西国際大学・共通教育機構・井上加寿子、と筆者を含めた8名である。
- 注2 LTD 話し合い学習法と不確定指向性『大学の学び 教育内容と実践』第4部 4 p.269
- 注3 大学レベルの授業を無償で提供する大規模公開オンライン教育のこと。講座によるが、入学手続きをして費用を払えば、コースを提供している大学の単位や修了証が修得できる。2012年は Year of MOOC (MOOC 元年) とも呼ばれ、多くの組織が立ち上がった。日本でも2013年11月に JMOOC (日本オープンオンライン教育推進協議会) が発足した。